渕之上昌平・寺岡　慧

［目的］腎移植の免疫抑制導入において，抗CD20モノクローナル抗体であるバシリキシマブの併用により急性細胞性拒絶反応の抑制が期待されるため，従来の免疫抑制剤を減量できる可能性がある．ステロイドは現在まで腎移植における維持免疫抑制剤として重要な役割を担ってきたが，長期使用における様々な合併症により，腎移植後のQOLを低下させてきた．そこで我々は，免疫抑制導入にバシリキシマブを併用しステロイド早期離脱を行う新規プロトコールを作成したので，その成績について報告する．

［対象と方法］平成14年3月から平成16年7月までに当科で施行した腎移植124例を対象とした．従来のシクロスポリン，ミコフェノール酸モフェチル，メチルプレドニゾロンに加えバシリキシマブで導入し，移植後14日までにメチルプレドニゾロンを漸減・中止とした．

［結果］急性拒絶反応を35例（28.2%）に認め，このうち1カ月以内が18例で最も多く，3カ月以内14例，それ以降が3例であったが，ステロイドパルス療法等により全例が改善した．早期離脱可能群は離脱困難群に比べ入院期間が有意に短く（術後24日），年齢や性別，原疾患，血液型やHLAの適合性，サイトメガロウイルスアンチゲネミア陽性率に差はなかった．一方，再還流などの再手術は離脱困難の危険因子となった．

［結語］バシリキシマブの導入により，ステロイド早期離脱が可能となり，より安全で質の高い腎移植の提供が行える．

透析患者におけるブラッドアクセス手術とその成績

（[1]腎臓外科，[2]第四内科学，[3]血液浄化部門）
春口洋昭[1]・廣谷紗千子[1]・甲斐耕太郎[1]・
小山一郎[1]・中島一朗[1]・渕之上昌平[1]・
二瓶　宏[2]・秋葉　隆[3]・寺岡　慧[1]

［背景］当科では，ブラッドアクセス関連の手術を年間約800例施行しているが，透析の長期化や高齢化，糖尿病患者の増加に伴い，自己動静脈を用いた内シャント（arteriovenous fistula: AVF）の作製が困難な症例が増加している．またグラフト（arteriovenous graft: AVG）の流出路静脈狭窄に対して近年，血流量のモニタリングと予防的なPTAによる開存率の改善が報告されている．

［方法］①AVF：1999～2002年の間に，透析導入のために当科に入院してAVFを作製した292例の開存率を，性別・年齢・原疾患別にKaplan-Meier法で計算した．②AVG：1994～2002年の間に当科で移植した520本のAVGを，前期群（1994～1996年：予防的なPTA未施行），中期群（1997～1999年：予防的なPTAを導入），後期群（2000～2002年：予防的なPTAを施行）に分け，開存率を計算した．

［結果］①AVF：1年，3年の一次開存率はそれぞれ77，66%であった．女性と糖尿病患者では開存率が低い傾向にあったが，有意差はなかった．65歳以上の高齢者では有意に開存率が低かった．②AVG：各群において1次開存率は有意差なかったが，2次開存率は，後期群が前期・中期群と比べて有意に高かった．

［結論］透析患者の高齢化や長期化に伴い，ブラッドアクセス作製・管理の重要性が再確認された．

**［ワークショップ
あきらめていませんか？ 関節と背骨の痛み］**

骨粗鬆症性脊椎椎体骨折の新知見と治療法の進歩

（整形外科学）　加藤義治

骨粗鬆症の定義は最近，従来の骨量重視から骨質すなわち骨構造，骨代謝回転，ダメージ蓄積，石灰化，骨基質の重視に変更された．骨粗鬆症による脊椎椎体骨折は，発生年齢が若く，発生数が多く，人種差がないなどの特徴をもつ重要な骨折であり，その発生部位は胸椎と胸腰椎移行部にピークがあり，連続多発性に発生し，脊柱弯曲異常となり，QOLが著しく低下する．さらに椎体の骨折数が多くなればなるほど死亡率が高くなり，生命予後にも関連することもわかってきた．本骨折の治療に際しては，その最終目的が骨折の初発および多発発生の予防であることを念頭に入れ，理学療法，薬物療法，外科治療を行う．とくに薬物療法は，EBMにも基づく治療として，Ca製剤，活性型ビタミンD製剤，ビタミンKは栄養素として補給し，治療薬としてはビスホスホネート，塩酸ラロキシフェンの強力な骨吸収抑制薬を使用する方法が主流になっている．これら薬剤の治療効果も骨代謝マーカーであるNTx，DPD（骨吸収），骨型BAP（骨形成）などで確実に判定しなければならない．さらに本骨折の外科治療として受傷早期のvertebroplastyなどが行われるようになったが，肺塞栓，神経麻痺など手術合併症に厳重な注意・対処が必要である．また遅発性脊髄麻痺に対しても，前方支柱の再建術のみならず，脊椎短縮術など有用な手術が行われるようになり手術選択の幅が広がっている．

人工膝関節形成術の進歩

（第二病院整形外科）　野口昌彦

人工膝関節形成術（TKA）の初期の発展の歴史は人工股関節形成術（THA）の発展の歴史と密接な関係がある．1938年にTHAにバイタリウムを用いる手術が成功するようになり，1940年にTKAにも金属を用いうることが報告された．1961年にCharnleyが発表したセメントを使用したTHAで優れた成績が得られるようになり，TKAもセメントを用いて人工関節を強固に固定する術式が普及し始めた．しかし，現在，一般的に行われているTKAの原型が完成したのは1973年にI/B型人工膝関節が開発されてからである．その後も，人工膝関節の材質，デザイン，手術器具の改良に伴い，現在TKAの術